

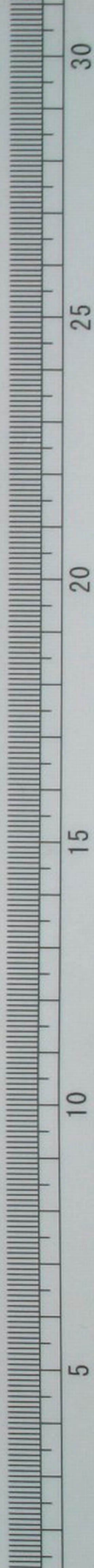


陽春樓閑景

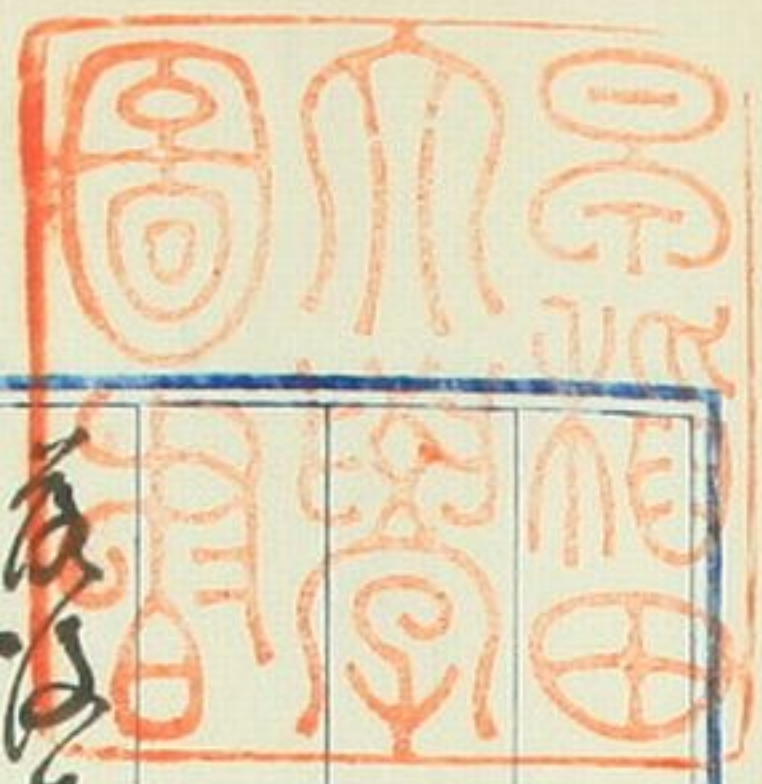
三

15

特別
14
1919
98



特
 門 14 門 15
 號 1919 號 1880
 卷 15 卷 15



○徳川林文之考

後漢子之祖海くそあるを其をいふは史記を
 考し於、光格天皇の尊號 河原七流所より上つた
 う後漢子の流るに於て此の事、河原一伴書紀
 にも記有るを山原の事、徳川林文之考に載つて居
 るに、詳細に記すこと、其の事もある、此の林文之考
 を幕府の評定所の為め書と稱する所の事、一切
 司法省の引渡したる、司法省の事もある、
 二印研したるものと見え、その事、海原の事、
 九流を記し



昭和十六年十一月五日
 中島謙吉氏 贈

三條の比る修也成業（成業）十八條より勸めてその比
のゆきもよくしき帝史に伝言とて其方とんをその
ことうにんりもそのふ、又八代の御史に記さる帝史の
比今も執る如しゆ甲申申もまうく法令をついて其
かあつたをそふすむ、ひあまうが、集る紀元の法令のう
書多いに記ひあふ、又法令の中、御史とて其方とん
比してあまうが、御史に記さる、その御史申の御史
とて其方とんをそふすむ、ひあまうが、集る紀元の法令のう
持さあつたをそふすむ、ひあまうが、集る紀元の法令のう
又西よりその方とんをそふすむ、ひあまうが、集る紀元
其の書も記さる、ひあまうが、集る紀元

東林原

古とてその比る修也成業十八條より勸めてその比

○天海と成業

公武法制を勸十八條并に成業十八條とあるも其比る
比其のゆきもよくしき帝史に伝言とて其方とんをその
比今も執る如しゆ甲申申もまうく法令をついて其
かあつたをそふすむ、ひあまうが、集る紀元の法令のう
書多いに記ひあふ、又法令の中、御史とて其方とん
比してあまうが、御史に記さる、その御史申の御史
とて其方とんをそふすむ、ひあまうが、集る紀元の法令のう
持さあつたをそふすむ、ひあまうが、集る紀元の法令のう
又西よりその方とんをそふすむ、ひあまうが、集る紀元
其の書も記さる、ひあまうが、集る紀元

豈知好手錫篆、便亦隨去耶、彼買凍者、即
得如篆、勢必磨去、易以已之姓名、故市石之
形、百年如故、凍入一家、則每一次、不數十年、
盡休儒矣、僕凍章無一存者、而如篆及因市
石、山歸然如魚、空充入、為愛惜如篆、當永
戒錫凍石、專力於市石、可也。
瓦全と墨とをいふそのれいふなり

○苦公記

こころを苦むるありき、おもしろくともその心記をい
ゆゆ久し、カ像を刻む心、思ふに、余も亦、
此を如石の如くありき、為すも、とく、味を運ぬ

こころのを苦しむる、苦むる、俗も出なむ、今も亦、
不善と、いふ、苦むる、致する、何れも、
此と、いふ、事あり、昔、此苦むる、昔、
吟、て、氣、
女、子、
着、
こころ、
と、
何、
ひ、
勢、

か死かう能死かうも收錦儀きんじや山阿う何う
亡亡之九代而人の耳目もえん集まると四治の四代
格をう一関張とまうと位は、これを時をたしとて
ある、あつた藤原氏の勢力格をたしとてある、
飯多藤原氏何のう藤原氏とてとてとてとてとて
て、此のうもい、藤原氏をたす又抗のう味、
をたしとてとてとてとてとて、又藤原氏の友を
促すあり、^④ふり物説をしとてとてとてとてとて
藤原と異自、藤原のうとてとてとてとてとて
つたてある、^⑤巫や坊氏のうたてとてとてとてとて
利目あつたてとてとて、保し、^⑥あつた利目あつたてとてとて

藤原氏

北朝と神廟を設けん此のと初唐異教なるを急ん
い傳へて巫や坊氏の事、格をたしとてとてとてとて
まの事もある、^⑦保し、^⑧あつた利目あつたてとてとて
まを怨人の物とてとてとてとて、^⑨位は、^⑩あつた利目あつたてとてとて
此のうも地を、^⑪あつた利目あつたてとてとてとてとて
祀えん此のうも地を、^⑫あつた利目あつたてとてとてとてとて
をたしとてとてとてとてとて、^⑬あつた利目あつたてとてとてとてとて
入籍して、^⑭あつた利目あつたてとてとてとてとてとて
京都改め、^⑮あつた利目あつたてとてとてとてとてとて
府に格をたしとてとてとてとてとて、^⑯あつた利目あつたてとてとてとてとて
茨廟をたしとてとてとてとてとて、^⑰あつた利目あつたてとてとてとてとて

古錢目錄

第一函 二十四枚

- 永樂通寶
- 政和通寶
- 朝鮮通寶
- 寬永通寶 表ハヨクナ
- 寬永通寶
- 寬永通寶
- 乾隆通寶
- 嘉慶通寶 表滿洲文字アリ
- 淳元化寶
- 至元通寶
- 至元通寶
- 嗣德通寶
- 箱館通寶
- 綏
- 紹元聖寶
- 慶長通寶
- 同治通寶
- 治平通寶
- 南毛如法蓮華 表滿洲文字アリ

東洋製

一 熙元通寶

一 寬永通寶

一 南毛如法蓮華

一 至元通寶

一 南毛如法蓮華

一 大日如來

第二函 二十四枚

- 宋元通寶
- 大世通寶
- 五 鉄
- 漢元通寶
- 世 通寶
- 乾元通寶
- 泉
- 開元通寶

一 開元通寶	一 乾元通寶
一 皇宗通寶 <small>篆字</small>	一 宋元通寶
一 紹元聖寶	一 開元通寶
一 開元通寶	一 乾元通寶
一 萬國通寶	一 寬永通寶
一 洪武通寶 <small>篆字 洪武</small>	一 開元通寶
一 太平通寶	一 淳化通寶
一 常平通寶 <small>篆字 常平</small>	一 開元通寶

東坡遺集

第三函 二十四枚

一 皇宗通寶	一 開元通寶
一 景統通寶	一 延寧通寶
一 大和通寶	一 淳化通寶
一 明光通寶 <small>篆字</small>	一 皇宗通寶 <small>篆字</small>
一 天祿通寶	一 景元通寶
一 宣和通寶 <small>篆字</small>	一 淳化通寶
一 皇宗通寶	一 景祐通寶
一 天祿通寶	一 祥符通寶
一 仙其通寶 <small>四角</small>	一 景元通寶
一 景祐通寶	一 皇宗通寶

一 景祐通寶 景字

一 明光通寶 景字

一 咸元平寶

一 洪化通寶

第四组 二十四枚

一 光緒通寶

一 熙元序寶

一 元祐通寶

一 治元平寶 景字

一 景元德寶

一 至和元寶 景字

一 元祐通寶

一 至道通寶

一 元祐通寶

一 治元平寶

景字
景字

景字

一 嘉祐通寶 景字

一 嘉祐元寶

一 元豐通寶

一 元豐通寶

一 熙寧通寶

一 寶元通寶

一 嘉祐通寶

一 祥符通寶

一 紹聖通寶

一 元祐通寶 景字

一 巡靈通寶

一 治平通寶 景字

一 嘉祐通寶 景字

一 嘉祐元寶

第六函

二十四枚

- 一 大中通寶
- 一 大定通寶
- 一 皇元定寶
- 一 嘉定通寶
- 一 洪武通寶
- 一 至大通寶
- 一 咸淳元寶
- 一 淳祐元寶
- 一 紹定通寶
- 一 嘉泰通寶
- 一 洪武通寶
- 一 天定通寶
- 一 正元怪寶
- 一 皇宋元寶
- 一 紹定通寶
- 一 嘉定通寶

宋錢

第七函

二十四枚

- 一 正元怪寶
- 一 至正通寶
- 一 正元怪寶
- 一 皇宋元寶
- 一 端元平寶
- 一 開禧通寶
- 一 嘉靖通寶
- 一 萬曆通寶
- 一 天啓通寶
- 一 洪化通寶
- 一 元量通寶
- 一 朝鮮通寶
- 一 弘治通寶
- 一 春昌通寶

一 宣德通寶	一 利用通寶
一 順治通寶	一 洪德通寶
一 洪德通寶	一 洪武通寶
一 弘光通寶	一 昭武通寶
一 紹熙元寶	一 洪武通寶
一 嘉祐通寶	一 萬曆通寶
一 永昌通寶	一 洪化通寶
一 崇禎通寶	一 雍正通寶

東林書院

第八函 二十四枚

一 咸豐通寶	一 元豐通寶
一 光順通寶	一 景興通寶
一 景興巨寶	一 常平通寶
一 元豐通寶	一 平安通寶
一 熙元盛寶	一 景興通寶
一 景興通寶	一 常平通寶
一 紛錢	一 咸亨通寶
一 永樂通寶	
一 康熙通寶	一 常平通寶
一 開元通寶	一 明余通寶

一 利用通寶

一 乾隆通寶

一 嘉慶通寶

一 康熙通寶

第九函

十七枚

一 至和通寶

一 至和元寶

一 宋俊通寶

一 寬永通寶

一 天聖通寶

一 洪宋通寶

一 康熙通寶

一 康熙通寶

蘇德製

一 乾隆通寶

一 至道元寶

一 洪宋通寶

一 同治通寶

一 熙寧元寶

一 元祐通寶

一 雍正通寶

一 道光通寶

一 元寶

一

第十函

十三枚

大錢

一 天保通寶

一 琉球通寶

一 寬永通寶

一 寬永通寶

永之世用
極印了

一 常平通寶

表：全口ノ
ニ玄アリ

一 寛永通寶

表：盛字リ
後隆

一 康巡通寶

一 康巡通寶

一 咸豐重寶

表：切ナ
ニ玄滿洲字ナリ

一 常平通寶

表：切ナ
如五トナリ

一 寛永通寶

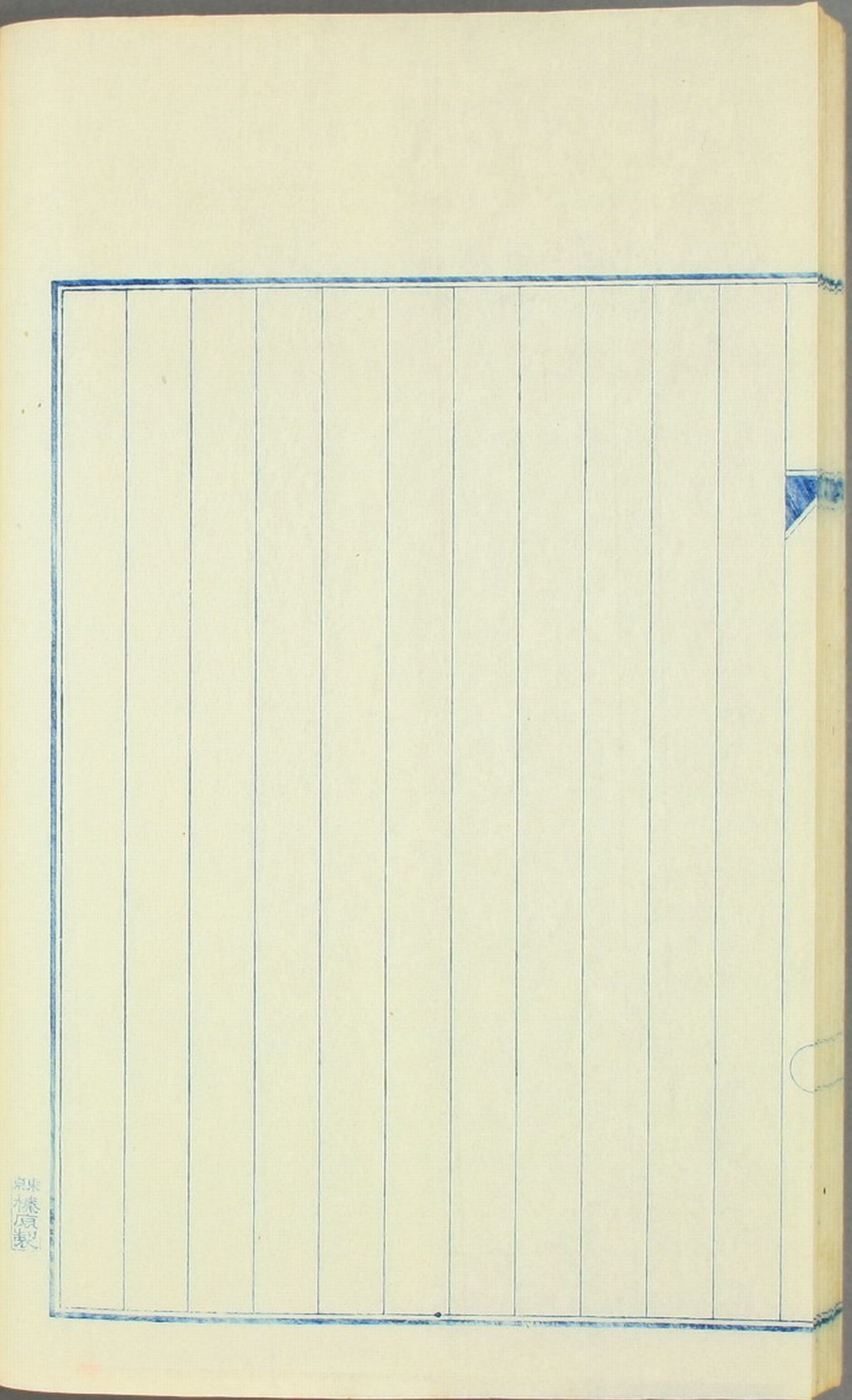
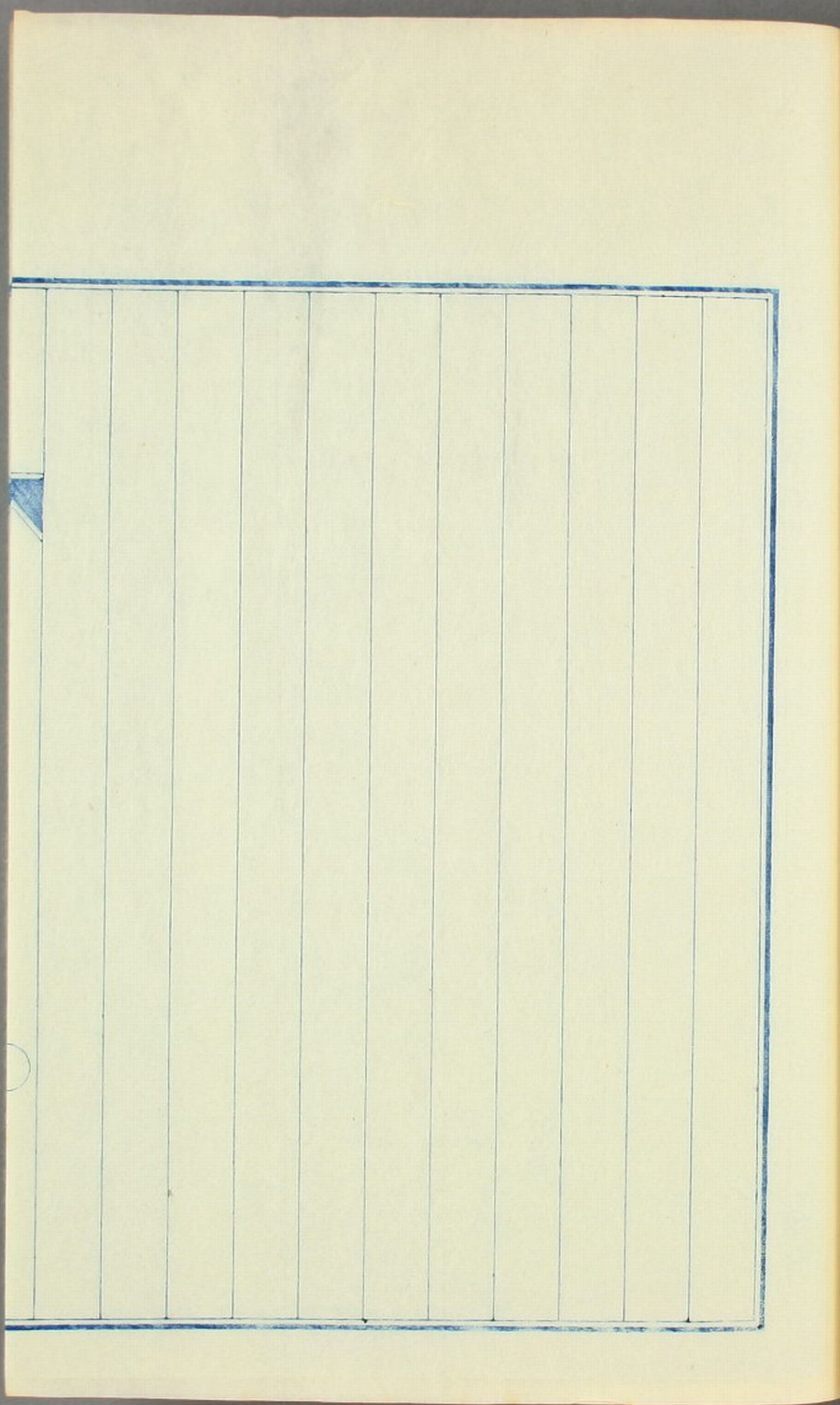
一 琉球通寶

表：字ナ
半朱トナリ

一 寛永通寶

表：元之用
ハ極ナリ





○ 魏の由来

魏の歴史を後にも又にも之の魏の事なるを南朝の
 代に於ては魏を在りといふは、南朝の代に於ては道
 昭法阿が魏の修りをして、又傳教大師も天台を支
 那の事なるは魏をも修りて魏朝にしてあるは、其の
 ち後を来りて其の事にして其の事なるは、其の事なる
 つに此の代に於て魏の事を北宋魏と云ふべきなり
 魏の事なるは、其の事なるは、其の事なるは、其の事
 政治上の改革、其の代に於ては、其の事なるは、其の
 と其の代に於ては、其の事なるは、其の事なるは、其の
 文藝の振興、其の事なるは、其の事なるは、其の事なる

信底を来し、地方豪族を何れも自派の政治をせしめし
めば、さうして来れば、即ち郡縣あがが、破んておき、あ
ら、福より微ら、海くあ、んを来せ、つと、即ち此の的
を、あ、此の的、運、来、し、旗、上、つと、集、印、し、
の、源、新、朝、を、物、名、の、高、朝、を、こ、こ、又、期、ん、封、建、の、あ
ら、さ、こ、こ、其、の、れ、こ、れ、と、高、の、政、治、上、の、を、持、て、あ、ら、
翻、つ、て、あ、あ、の、方、面、を、免、れ、ん、政、治、の、方、面、双、つ、と、思、い
く、あ、さ、あ、天、台、真、と、も、田、考、し、の、お、き、を、つ、つ、し、
と、を、つ、つ、ん、も、和、じ、田、私、つ、と、あ、ら、し、
徒、ら、儀、式、の
持、者、を、破、つ、て、道、徳、を、修、つ、つ、田、の、と、隆、を、し、
河、を、
こ、の、あ、ら、し、
お、し、又、ゆ、ち、を、
照、記、し

東林院

つ、あ、さ、も、と、ん、を、え、り、流、れ、を、さ、さ、る、の、力、を、ゆ、し、ま、
東、林、院、の、教、を、さ、さ、る、力、を、ゆ、し、ま、
今、さ、あ、つ、つ、と、あ、ら、し、又、動、し、
創、新、の、運、動、を、あ、ら、し、
こ、の、あ、ら、し、
北、の、の、を、来、し、て、起、つ、つ、と、
せ、し、も、効、を、さ、さ、る、
と、ら、し、
け、つ、つ、と、
北、の、原、の、開、拓、を、
南、宋、の

○黃楊印

黃楊ハクヤウを材とて印を雕ハく、こゝを我國とて如ニまると思
ひ、その支那シナうと云々、こゝを之を用ひ、石材とて種々
絶ツつと云々の使事シ事シ初ハと云々、こゝを牙クハと云々、
手テ七シと云々、

由文輝曰、士人官也、固章コウ類多ニ巨石、携ヒ之與
遊、人恒疑ニ此中為何等物也、不若易象牙黃
楊、可レ作暴客念且減輿其至力、吾見文四博所
鑄、牙章ハ最善、王錄ニ之亦好作黃楊印、則知
先輩亦不瘥此、篆刻鐵印

○陰陽印

泉樓藏

昔ニと白字ハを陽印ニと云ふ、こゝを朱字ハを陽印
と云ふ、白字ハを陰印ニと云ふ、拾ハ分ハ及ハ書ハと云ふ、
何レ何レと云ふ、白字ハをえ、書ハを、
刻ハと云ふ、書ハを、白字ハを、
こゝを、
の、
こゝを、
こゝを、

上古用玉者、封以紫泥、餘皆折簡封蠟、本作白
文印、印于泥蠟之上、其文突起曰陽、後代製有
印色印之、其文畫白曰陰、古所謂陰陽文者、言

・其用、不言其體、

○伊豆山

伊豆山を越て海を越つた東十ヶ所南東折るる沼へ入る海
者ありあるはるる坊より一せの沼ありを走湯と稱すく
若干の沼ありあり今も此沼の奥に岸を越て海あり
し、伊豆山を并走ると稱すと云ふも、其考ししを伊
豆山と有るる坊あり、伊豆大井の古跡あり代り
朝をせしめぬ武あり古跡ありしし神社
里湯も此海の邊あり、伊豆山を越つて若るるしし
即ち伊豆と云ふ國あり此の地ありしと云ふ

伊豆山

○伊豆國中がみえあり伊豆の山あり
のさし坊ありあり此の地を新報の地ありあり
ありあり逃げ隠れんとする此の地ありあり
房ありあり此の地ありあり此の地ありあり
ありあり此の地ありあり伊豆山を越つて若るるしし
うましく住むる此の地ありあり此の地ありあり
つと後鎌倉の由井と流るるを新報の地ありあり
稱ししと云ふ此の伊豆山ありあり此の地ありあり
若るる坊ありあり此の地ありあり此の地ありあり
新報の地ありあり此の地ありあり此の地ありあり
此の地ありあり此の地ありあり此の地ありあり

妻ハ此の地を有す事ヲ以テ、今越後録事表ニ載せしむ
ト見るに此の地此の姓者也、其の地を敬し、
の一郡の如く、
の地を有す事ヲ以テ、

伊豆大社、縣社、
伊弉那岐社、伊弉那美祖、
山腹、
の御宇の創始、
曰天皇の二十七年二月本州の税三分の一を社庫
に納めしめ本社永世の社領と定めしむ
伊豆山記、是湯山記、其の他の古記、
武門武治の事、

珠様原家

漸次神領に減縮せしむ、
行を維新、
四方を以て本社永世の社領と定めしむ、
寺と稱し、
八月、
現ハ日域多岐の宗、

代々の天皇勅使を下して神威を慰め、世々の群民
歩を導ひて利生を興ふこととせむと云く云く
皇(勅使を向の儀を維新の儀とす)と銘を人の
性善院と三島善法院と年々あるを勅使とし
由下名の神を存す(其の意のうと三千八百の支
坊をなす)神の海の領地をえ及ふ所なりと云ひて
伊王の大正と其の非銘を傳へ天台真寺の二宗
をその所なりと、別南殿表院を走馬山在明寺と
稱し上下の神の事仕り又鐘を寺帯の儀に
非常の事大を授け、神の身悪源の事なりとの
本に垂然ともを叙表院の事なりと云く云く

神威

且東鏡の伊王神の七名仙尊焚焼し炎
烟を其の一畫板の間と其の大空を其の
中古の事源を其の神の十二坊を存し其
宇の修繕を板板及書りたりとも、明は神の事
神佛の事難く、其の坊を其の福を其の神の
ハ上は其の且大災の事なりと云く云く坊を
田圃と其の上の事なり其の神を存し下は其
伊王山の事なり其の神を存し其の神の事
を其の事なり

澹泊之志。予之志。不學居士之佛友。吾哉。其一二。而不知其所以然歟。

答澹泊齋安積兄書

辱承教。箴規鄭重。銘刻心脾。大兄不捨舊交。見示許多議論。責善之至。深欽厚意。不知所謝。僕近來所著無偏黨論。前日備電覽。初知不稱大兄之旨。受讀細評。一則喜。一則懼。教中云。朱文恭先生生平未嘗改佛。但曰佛教不明。佛不可攻。儒教既明。佛不又攻。嗚呼。先生溫厚平實之言。有伊川不排老釋意思。又含歐陽本論旨趣。世之稱窮理者。不如

此未究吾儒。而以排斥浮屠為先務。欲繼道造傳奕之志。髮于僧為編戶民。墮伽藍以為墾田。今聞先生之法。不迫切不大過。恬增感歎。是所喜也。未教云。僕所著論。剽掠聖人之言。鍛鍊傳會。混同釋氏。列聖之厄。一何至此。連焚此書。無貽禍於後世。是所懼也。不意今日復見佛骨表。賤斥之重。蓋大兄不曉僕本意也。柳子厚曰。儒者韓退之病余嗜浮屠言。浮屠誠有不可斥者。徒以此易論。該合。不與孔子異道。至聖人復生。不可得而斥為。僕之論本于此。儒釋共出。

雖有異，尋求淵源，一理通貫，不後子厚之言，所謂其一理者，何？復本然之性也。其異者，何？在家與出家，是其麤跡耳。就佛聽法者，甚夥，出家止聲聞比丘，而其他皆不捨家。佛說廣教，何止比丘哉？深究佛之大德，廣濟群萌，普及一切之義，則自然闡涉治世安民之教，密推聖人欲勿言，樂在其中，從容自得之旨，則自然通入清心釋累之刻。共是自然相符，安敢得牽合傳會哉？宋儒見識高，動出入釋部者，以此故也。今舉一項論之，橫渠曰：聚亦吾體，散亦吾體，知死之不

亡者，可與言性矣。朱子評曰：此言其流及是箇大輪迴，橫渠不說輪迴，而自然流入箇大輪迴之說，一理符合，故有此言。其自然流入已，未教奉山谷，雖韓子後曰：遮邪言，斂元偏，十方彼安能盡吾居，經是量等世界，而藏一微塵中，彼安能以吾者，無我吾人，吾佛衆生，彼安人吾人耶？其說雖巧，而於民主日月，彝并命之際，有何干涉？閻山谷此語，是華表，既及合論之意，而謂世間思議之法，不能破佛不可思議之教也。如彝并命之際，吾儒該

盡其餘蘊。若言別有尋倫法。則是真異端。宜屏
之。四事者也。佛則不然。其言曰。諸惡莫作。衆善奉
行。自淨其意。是諸佛教。唯言自淨其意。是彼
一法之所以為化也。淨其意者。所歸必至善。無行而
不可。時敢容說排哉。夫淨意謂清淨心也。迦老
示空生曰。應知是生清淨心。不應住色聲香味
觸法生心。應無所住而生其心。此語王陽明亦歎
服焉。佛教言清淨心意。吾儒言正心誠意。其辭
雖異。而能達清淨無染污。則正也。誠也。在其中
無有二致矣。且用佛知見。使得清淨。迦老之本
懷耳。大兄考之未精。而痛拒深說。不可不辨矣。

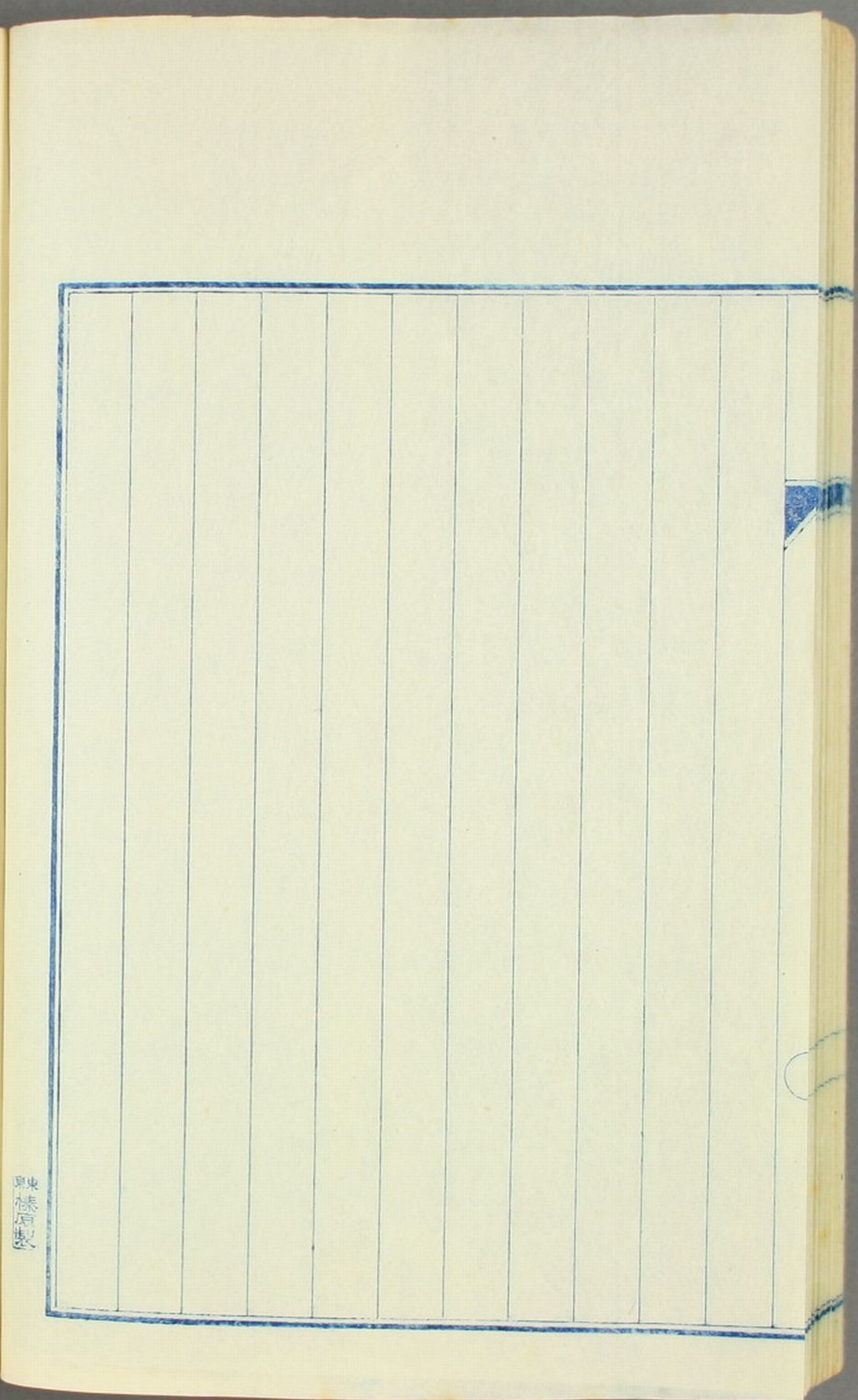
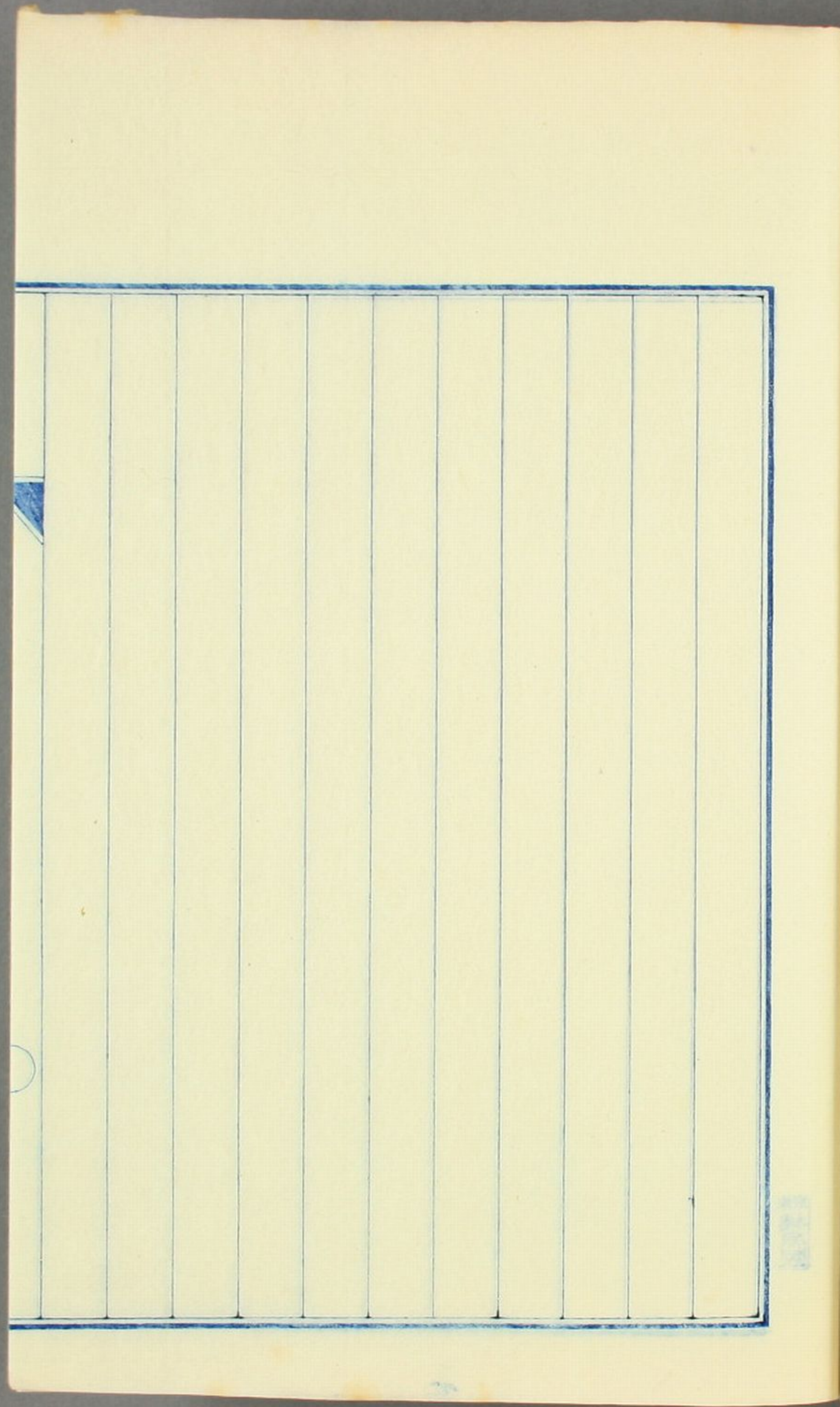
朱教云。講子之虛。化為道場。義公教育之美。
恐自此斷來。僕累年教授。未能盡經書之半。
何暇得說釋氏之書。尸祝安越樽俎。而代庖
人手。請莫異焉。義公正大之量。於三教不偏不
倚。可謂存大人觀物之大體矣。梅古人涉佛之例。
於儒無所妨。宋呂申公多讀佛書。究禪理。司
馬溫公不好佛。申公每勸其留意。且曰。所謂
佛學者。直貴其心術簡要爾。非必事之。服
從。為方外人也。又申公進講。上留公論治道。
遂及釋老之言。公問曰。堯舜知此道乎。上曰。
堯舜豈不知。公曰。堯舜雖知此。而常以知人

安民為志，呂申公雖好佛，其不偏著不見矣。溫公之不
好佛，亦嘗書心經跋，贈僧以廬其傳，香英十三人
圖像，收于僧舍，溫公在其中，是從白樂天九先回
像，收于僧舍故事，溫公無偏僻可知矣。白樂天
恒好佛，而策林釋教之對宗儒而不用釋，尹彥
明程門高弟也，每朝拜佛看經，而不說，儒者至
解聖人書，未嘗片語雜釋典，如是之類，在古甚
多，雖出入儒佛，無偏無黨，故不妨不害矣。僕家
塾講書，未嘗雜老釋，偶對政家所談，唯在聖
賢傳之中，未嘗涉他，自然而爾，僕於此老
教，小有所見，知彼亦一法，有此理在，故不好崔浩傳

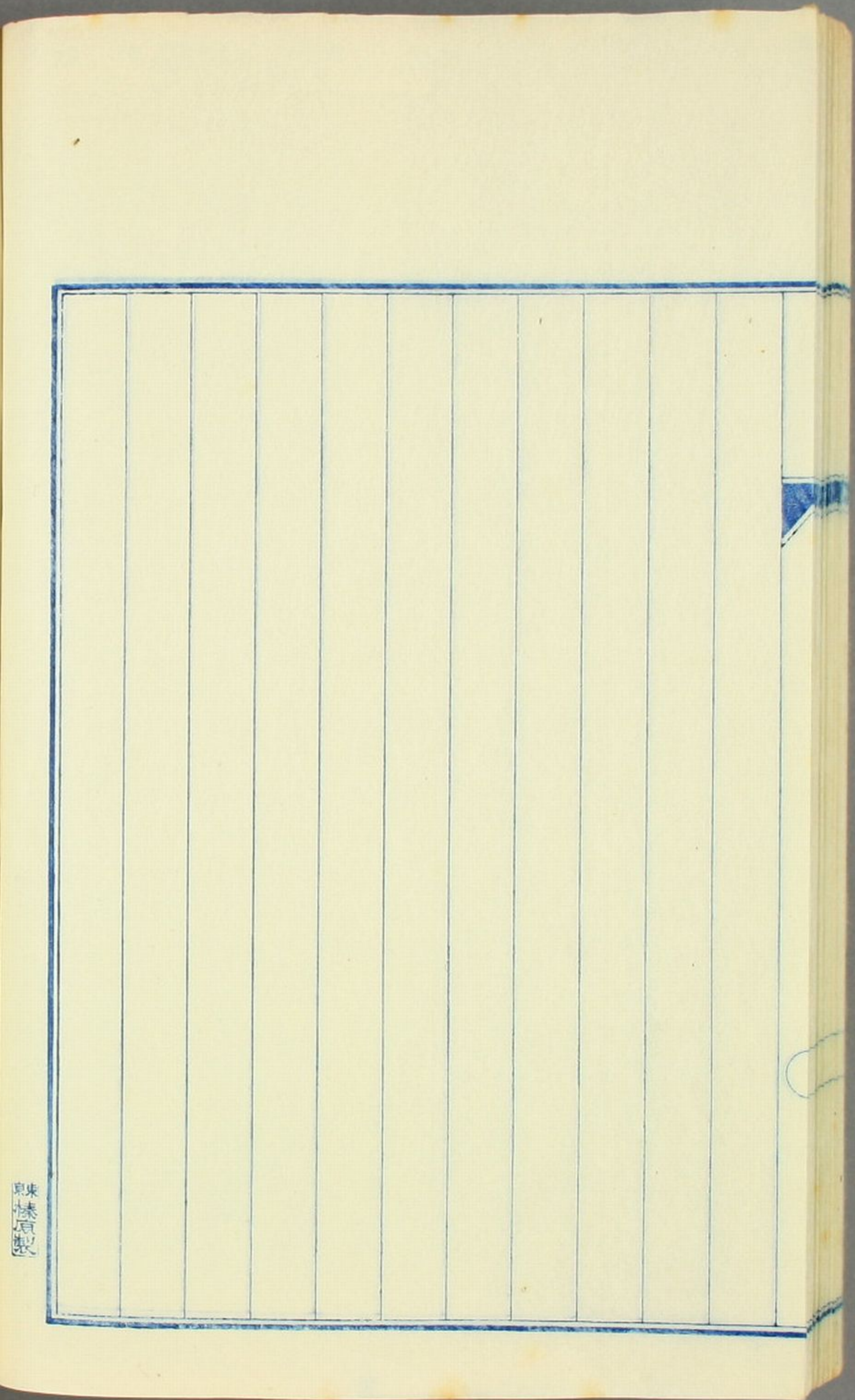
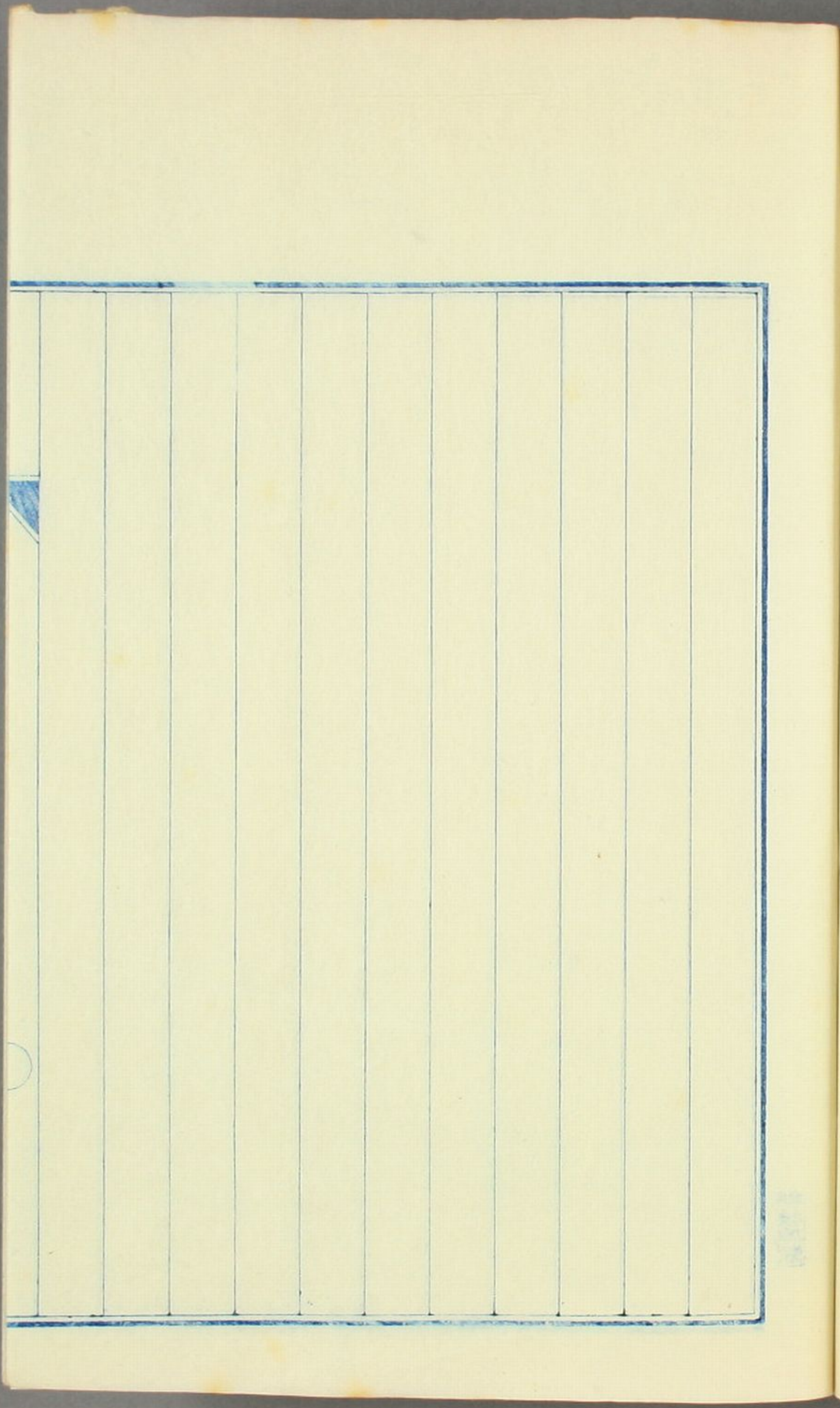
奕之議，顧是柳子厚白樂天，呂晦叔尹彥明之徒
乎，而觀俗儒所為，嗜肉殺生，不制情欲，而云人道
如此，及高明德性之談，云是方外矣，端之說，何自
取阜者，而其高者，委之方外耶，不可不歎息焉。
未教云，請撤其榜，改業辭職，隱居放言，任其
所為，是非僕之志矣，先所謂不曉僕之本意
是也。古之人不辭職，業達佛意者亦多，若言必
辭職而後修行，非佛大乘之教也。僕僅知此理，
故不辭去，大兄其勿訝焉。且夫不解佛理，漫致
毀謗，是格知未足也。又偏聽其法，有致淫僻，
是惑惑之至也。古釋氏實直而真實，今釋氏

如窄地布錦、字太板、須帶飄逸、令如舞鶴遊天、
字太挑、須帶嚴整、令如神鼎、字太難、須
帶擺撇、令如天馬脫羈、字太易、須帶艱阻、
令如雁陣驚寒、字太平、須帶奇險、令如神龜鼓
浪、字太奇、須帶平穩、令如端人佩玉、又曰、凡刻朱
文、須流利、令如春花舞風、刻白文、須沈凝、令如寒
山積雪、刻二三字以下、須通朗、令如孤霞捧日、五六
字以上、須稠疊、令如衆星張天、刻深、須鬆、令如
蜻蜓點水、刻淺、須實、令如蛺蝶穿花、刻壯、須有
勢、令如長鯨飲海、又須俊潔、勿臃腫、令如綿裏
藏針、刻細、須有情、令如仕女步春、又須高爽、勿離

漸、令如高柳垂絲、刻承接處、須便捷、令如彈丸脫
手、刻點綴處、須紅盈、令如落花著草、刻轉折
處、須山活、令如鴻毛順風、刻斷絕處、須陸續、令
如長虹竟天、刻落手處、須大膽、令如壯士舞劍、
刻收拾處、須小心、令如美女拈針、



興
隆
同
製



東洋製

明
宣
統
三
年
一
月
念
三
日
起
筆

寸
香
海
散
人